

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.77

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

新年のご挨拶

田村道美

会員の皆さま、あけましておめでとうございます。本年が皆さまにとって素晴らしい1年となりますことを心よりお祈りいたします。

わたくしは昨年5月に支部長に就任いたしました。5月の例会は勤務先の大学のフレンドシップ事業と重なり欠席、9月の全国大会は父の13回忌と重なり、支部活動報告は前支部長の竹中先生にお願いするなど、支部長の務めを十分に果たすことができませんでした。竹中先生を始め他の先生方に多大のご迷惑をおかけしたことに対してお詫び申し上げます。

さて、昨年12月例会は山口市の歴史民族資料館において開催されました。会に先立ち、昨年8月に逝去された寺田芳徳先生に哀悼の意を表し黙祷を捧げました。その後、毛利博物館館長等を歴任され、現在は山口県地方史学会の会長であられる小山良昌氏による講演「杉孫七郎の渡欧と長州ファイブ」と上杉 進副支部長による「松下村塾最後の塾生 正木退蔵と吉田寅次郎」と題する研究発表がありました。

小山氏のご講演の中で、「毛利家は大江氏を祖とするが、さらに平城天皇にまでさかのぼる家系ゆえに根っからの勤王家であり、その事実がわかると幕末当時の長州藩の言動がすべて理解できる」と述べられましたが、このご指摘には目から鱗の思いがいたしました。上杉先生のご発表では、R. L. Stevenson に世界最初の松陰伝 *Yoshida Torajiro* を書かした正木退蔵の生涯と彼の師吉田松陰が退蔵たちに何を教えたかを知ることができました。上杉先生によれば、松陰が弟子たちに教えたことを一言で言えば「方今（今まさに何をするか）」であり、常にこの問いを弟子たちに発することにより、激動の時代への対応力を養成しようとしたとのことでした。藩校明倫館の秀才たちが松下村塾へもその足を向けた理由はまさに「方今」の思想ゆえであったことを理解することができました。

小山先生のご講演の直後に資料展観の時間が設けられ、歴史民族資料館所蔵の大村益次郎関係の貴重な資料を見ることができたのも大きな収穫でした。

今回の山口例会は近年稀に見る盛況で、発表会場はほとんど満席となりました。これもひとえに上杉先生のご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。平成26年度の例会も山口大会に負けないよう充実したものしたいと思いますので、皆さまの一層のご支援をお願いいたします。

(中国・四国支部支部長／香川大学)

平成25年度 第2回(通算69回) 研究例会 報告



2013年12月14日(土)、(山口県山口市)において、本年度第2回(通算第69回)研究例会が開催されました。地元の方々を含む26名の参加がありました。

ご講演くださった小山良昌先生、会場としてお世話になった山口市歴史民俗資料館の皆様、そして会の準備から当日の運営まで終始ご尽力くださり、研究発表もしてくださった副支部長 上杉 進先生に、心より篤くお礼申し上げます。

プログラム

開会行事 (13:00-13:05) 支部長挨拶 田村道美 (香川大学)

講演 (13:05-14:35) 司会・講師紹介 上杉 進 (元高水高等学校)

「杉孫七郎の渡欧と長州ファイブ」

小山良昌氏 (山口県地方史学会会長・元毛利博物館館長)

資料展観 (14:35-15:20) 山口市歴史民俗資料館所蔵資料 (大村益次郎関係ほか)

研究発表 (15:20-16:20) 司会 保坂 芳男 (拓殖大学)

「松下村塾最後の塾生 正木退蔵と吉田寅次郎」

上杉 進氏 (元高水高等学校)

閉会行事 (16:20-16:30) 副支部長挨拶 松岡博信 (安田女子大学)

忘年懇親会 (17:30-19:30) 心和食まほら (山口市湯田温泉)

講演 「杉孫七郎の渡欧と長州ファイブ」

小山良昌氏 (山口県地方史学会長・元毛利博物館館長)

【講演概要】

万延元年(1860), 幕府の遣米使節に随行した藩士北条源蔵, ついで、翌文久元年(1861)幕府の遣欧使節に随行した藩士杉孫七郎から, 欧米の進んだ文明の実態報告を受けた藩首脳は, 攘夷運動の先頭を走る長州藩の攘夷戦は負け戦となることを覚悟。藩が採った「次善の策」が, 若き優秀な藩士5人の英国留学であった。5人の内, 井上馨と伊藤博文は4国艦隊の下関報復戦の情報を入手し, 急遽帰国し, 講和会議の通訳として活躍する。



【参加者の感想】

◆大変楽しく拝聴させて頂きました。また、幕末の長州藩のとった行動は、「平城天皇にまでさかのぼる勤王の毛利家」という観点から見るとよく理解できるとの指摘は大変に参考になりました。〈Emma〉

◆高杉晋作ではなく、幕府の遣欧使節団の一員に選ばれた杉孫七郎は、苦勞してヨーロッパに渡った。欧米の進んだ文明に接した杉孫七郎の帰国報告により、攘夷運動での長州の不利を覚悟した藩が、井上、伊藤を含む「長州ファイブ」をイギリスにへ派遣した。そうした幕末の動きを、まるで講談師(?)の如き弁舌で、興味深く語っていただいた小山先生の講演に酔った90分であった。〈K.F.〉

◆ユーモアを交えて杉孫七郎ならびに長州ファイブの留学、並びに、それによってもたらされた長州藩の攘夷を巡る方針の転換等のお話をいただき、興味深くうかがいました。山口県である前に「長州」であると言わんばかりの——これは後の上杉先生のご発表とも通じますが——気魄に圧倒されました。

〈Dragon〉

◆長州ファイブについては宮地ゆう (2005)『密航留学生「長州ファイブ」を追って』(萩ものがたり Vol.5)を読んで概略を知っている程度でした。今回、小山先生のご講演を拝聴し、若き優秀な藩士5人の英国留学が突然ではなく、杉孫七郎らの「地ならし」があって実現したことをはじめて知りました。明治新政府誕生後の日本の歴史を振り返りますと、藩が採った「次善の策」が、実は「最善の策」であったことがよく理解できました。〈もみじまんじゅう〉

◆幕末から明治維新までの本当に複雑な当時の様子を、時々刻々とリアルに語られました。文久2年に渡欧した杉孫七郎も、長州ファイブたちも「攘夷は

不可能」と述べていました。外の世界を見ることに重要性を再認識させられました。「人の器械」を養成しようとした当時の毛利藩の先見性に感銘を受けました。地元ならではのお話が聞けて良かったです。ありがとうございました。

◆「攘夷の儀、5月10日拒絶に及ぶべき段、御達し相ひ成り候あひだ、銘々右の心得を以て、嚴重に相備へ、襲来候節は掃攘致し候やう致さるべき候」(文久3年(1863年)4月23日付幕命)。幕命が下り5月10日長州藩の攘夷実行。その2日後長州藩士を横浜港から密かに英国ロンドン大学へ派遣した。国禁を破り欧米の近代文明を積極的に学んだ「長州ファイブ」と杉孫七郎の訪欧派遣を許可した藩主毛利敬親の懐の深さに感動致しました。大変興味深く拝聴させていただきました。感謝。〈山田宗八〉

◆学校で教わった「歴史」だけがすべてではない。当時の「真実」を伺いながら、新たな歴史観を構築し直しました。杉孫七郎、初めて聞く名前でしたが、あの高杉晋作より優秀であったという事実はとても新鮮でした。「命」を懸けて西欧に渡り、文明を学び、そして日本を守ってきた当時の方たちのおかげで今の「日本」がある。毎回、「歴史」を学ぶことによって心が引き締まる思いです。ありがとうございました。〈Rainbow〉

◆杉孫七郎の渡欧から長州ファイブの英国留学に至る経緯やその後の影響について、実にたくさんのエピソードを交えてのご講演は、あっという間の90分間でした。長州ファイブ密航前夜のスリリングな様子や、彼らが乗船した異なる船での待遇の違いなど、その映像が目には浮かぶような臨場感あふれるお話に、引き込まれました。貴重なご講演をまことにありがとうございました。〈Horse〉

◆万延元年(1860)について文久元年(1861)と幕末の日本の攘夷運動のさ中に杉孫七郎の各国訪問、藩士5名の英国留学について、小山先生の誠に詳細な御説明に感服するばかりでした。攘夷は不可能と判断した杉孫七郎や長州ファイブによる渡欧へ向う長旅の苦勞を思うとき、何と現在の日本の留学制度は幸せそのものであることに感謝せねばなりません。有難うございました。〈五十嵐二郎〉

◆明治維新という近代国家成立期前の長州藩の取り組みを知ることができました。鎖国政策に逆らって

藩士を外国へ派遣するという英断が後の明治政府の中枢で活躍する結果に繋がったと強く感じました。特に洋行が「長州のためでなく日本のためだ」という意気込みに感銘を受けました。昨今の選挙区のことばかり考えているような政治家に聞かせたいものです。英語学習の観点からすると、ほとんど英語が分からなかった者がロンドン大学でどのようにして学んだのかという点をもっと知りたいと思いました。〈JH4DGW〉

研究発表「松下村塾最後の塾生 正木退蔵と吉田寅次郎」

上杉 進氏 (元高水高等学校)

【発表の概要】

上級武士の子退蔵が明倫館で学びながら、松陰に何を求めたのか。松陰は時代の方向性を的確に捉え、塾生に歴史の舞台での自らの位置を意識させ、方今の急務を説いた。退蔵は「原書を読む」を志し、念願の英国留学を果たす。2度の留学で得た経験を生かし日本の近代化に貢献し、松陰を語り続けた。

文久2年松陰大赦。松陰は是。翌年藩府は村塾の伊藤、山県を始めとする軽輩を士分に取り立て、松陰の遺文を明倫館に集め通読に供した。遺志が受け継がれた所以である。

萩から山口への移鎮、150年の節目に山口城の跡地で松陰を語れたのは欣快であった。



【参加者の感想】

◆大変興味深く拝聴いたしました。これまで先生が追求されてきた「松陰は何を教えたか？」についての解答「方向」について共感いたしました。と同時に、松陰の教えと Stevenson の“Yoshida-Torajiro”との関係をもう少し詳しく論じて欲しかったという気がいたします。忘年懇親会でおうかがいしようかと思っております。〈Emma〉

◆「公武合体」が藩是であった長州が、文久2年(1862年)7月藩是を転換し尊皇攘夷とする。文久3年(1863年)藩主毛利敬親が山口御茶屋に入り、新築城の決定。萩の役所や学舎の移転が行われた。新たな藩校となった「山口明倫館」が洋学の中心となった。松下村塾とのかかわり、その人脈、人物像の歴史的背景がとてもよく分かりました。大いに刺激を受けました。研究例会に参加してよかった。ありがとうございました。〈山田宗八〉

◆地元の研究者らしい内容の濃い発表でした。当初、正木から吉田松陰の話聞いたスティーブソンは、彼の魅力が理解できませんでした。上杉先生の発表を聞いてそのあたりが明確に分かってきたように思

います。彼は、具体的な実学(兵学など)を教えたというよりも、人間としての生き方を問うたのではないのでしょうか。優しさとは、「人」を「憂」うこと、印象に残りました。会場の運営から、地元参加者の組織等、素晴らしい例会でした。ありがとうございました。

◆正木退蔵について、その精神形成における吉田松陰の意味合いがいかにかに大きいかを伺うとともに、その英語を使つての活躍をお聞きしましたが、その正木がどのようにして英語を習得し、あれだけの英語力を身につけたかを明らかにしていただければと、臆を得て蜀を望むの不遜とは思いつつ、期待するところです。〈Dragon〉

◆どこかで聞いたことがあるなという程度の認識であった正木退蔵の人物像、彼の日本近代化への素晴らしい貢献を浮き彫りにして下さった密度の濃い研究発表でした。国造りの中核的な役割を果たした長州の逸材の勉強を深めなくてはと改めて感じました。上杉先生が「そおせー」とおっしゃらなくても、細々とですが長州にこだわり続けます。

〈もみじまんじゅう〉

◆弟子が語る師、吉田寅次郎の描写がきれいごとだけではないところがとても印象的でした。個性的であったにも関わらず吉田の学問への情熱が多くの子の心を奪った。その素晴らしい吉田を世界へ紹介できたのも、正木と Stevenson との出会いがあったからこそでしょう。人との出会いの重要性を痛感しました。<Raibnow>

◆正木退蔵が吉田松陰の尊王論と開国論に賛意を示し、実学を志して英国留学を果たし『宝島』の作者 R. L. Stevenson (1850-94) に会って師の松陰について語ったことをはじめて知りました。上杉先生有難うございました。門人一人ひとりの内面的成長をうながす松陰の強い指導力が外国人にまで恩師のことを語らざるを得ない程の impact をあたえた事実は、現今の日本の教師と学習者の関係について、また日常の教育活動をどう進めるべきかについて考えさせる問題を提起してくださいました。学恩多謝です。<五十嵐二郎>

◆正木退蔵は、明倫館、松下村塾、大村益太郎、

Vedder (英学) の薫陶の下にイギリス留学をしたが、彼の心には吉田松陰の精神「方今一？」(今まさにすることは何か?)があった。黒板をたたきつけるように熱っぽく語られた上杉進先生の迫りに圧倒された。正木と Stevenson との出会いに、今少し言及して下さるとよかったと思うが、時間が足りなかったのかも知れない。<K.F.>

◆長州藩において、多くの藩士が藩校で学びながらなぜ松下村塾でも学んだかという、吉田松陰先生の指導力のすばらしさを感じました。「歴史の中でまさに今何をなすべきか」と問いかけて、考えさせ、討論するという、単に知識の伝達にとどまらない指導法は現代にも十分通用するものだと思います。

<JH4DGW>

◆上杉先生の熱い語り口と詳しい資料に感銘を覚えながらご発表を伺いました。松陰の教えは、今なおこの地に息づいている、という思いを強くしました。松下村塾の名前の由来などのエピソードも興味深かったです。ありがとうございました。<Horse>

資料展観／研究会全体について

◆大村益太郎を中心とした貴重な展示品を見て勉強させてもらいました。<Emma>

◆この12月研究会は、地元郷土史の視点からこのような講演、研究発表を伺うことができ、さらにこのような貴重な資料を目にすることができるという楽しみがあり、加えて忘年懇親会では地元の美味しい料理を堪能できるということで、今回もこの山口例会を十分に味わうことができました。

<Dragon>

◆維新の薫りがまだ残るかと思える山口市に来て、郷土の歴史に詳しい方々からお話を聞く機会があり、有意義な研究会であった。<K.F.>

◆今回も知的水準の高い「お・も・て・な・し」にあずかった研究会でした。これもひとえに小山・上杉両先生、事務局の皆様のご尽力のおかげ、本当にありがとうございました。

懇親会でも両先生のすぐ近くに着席、昼の部に負

けないほどの研究ができた充実の「長州の夕べ」でした。<もみじまんじゅう>

◆発表者の両先生共綿密に資料を作成していただき、分かりやすくお話くださり有意義な会でした。懇親忘年会もごちそうと十分な飲み物といただきながら歓談でき満足しました。

いつもながらお世話いただいた馬本先生をはじめ、会員の先生方がよいお年をお迎えになることをお祈りしています。本当にありがとうございました。

<JH4DGW>

◆湯田温泉のお湯の熱さに負けない「熱い」思いでご参加くださった皆様にお礼申し上げます。ご講演、ご発表くださった小山先生、上杉先生、素晴らしい会場と資料展観の機会をご提供くださった山口市歴史民俗資料館の皆様には感謝いたします。まことにありがとうございました。<Horse>

英学史学会全国ニュース

>> 「日本英学史学会報」No.132

2014年1月1日発行。次の記事などが掲載されています。

・福井で会いましょう！(会長 北垣宗治)

・洋学史(江戸)散歩(8): 森山多吉郎(本妙寺豊島区) (堀 孝彦)

・徳富猪一郎の晩年: 成篁堂文庫をめぐって (石倉和佳) ほか

※閲覧希望の方は、事務局までご連絡ください。

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費7,000円)。

中国・四国支部ニュース

>> 『英学史論叢』第17号原稿募集について

ニューズレターNo.75, No.76 でお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』第17号(2014年5月発行予定)の原稿を募集しています。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様のご積極的なご投稿をお待ちしております。

- ・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.75、および『英学史論叢』16号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。
- ・原稿提出の締め切りは、**2014年2月20日(木)**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。
- ・研究論考・研究ノートの投稿は3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

寺田芳徳先生を偲ぶ「追悼記」(B5判1ページ)の締め切りは、**3月31日(月)**です。書式はニューズレターNo.76をご参照の上、郵送、もしくは電子ファイルをメールに添付して、事務局までお送りください。皆様のご寄稿をお待ちしております。

>> 平成25年度第2回理事会

2013年12月14日(土)、山口例会に先立って開催された理事会において、今年度の活動報告および平成26年度活動計画について協議しました(出席者7名)。

当日の協議とその後の調整の結果、来年度の支部総会ならびに第1回研究例会は2014年5月24日(土)に安田女子大学(広島市)にて、第2回は12月13日(土)に香川大学(高松市)にて、それぞれ開催する予定で準備することとなりました。

平成26年度第1回(通算第70回)研究例会発表者募集

平成26年度第1回(通算70回)研究例会を、2014年5月24日(土)に安田女子大学(広島市安佐南区)で開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学 馬本研究室

申し込み受付期間: **2014年2月21日(金)～3月20日(木)**

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

広島英学史の周辺(43) Stevenson の *Treasure Island* は、大学時代のテキストの一つでした。ペーパーバックの冒頭に出てくる bacon and eggs のところで、先生が両面を焼く目玉焼きの話を読んだことを覚えています。▼そのスティーブソンが吉田松陰のことを書いたというお話、たいへん興味深かったです。インターネット上の原文では、獄中の松陰に対し、先に刑に処される同獄の士が、"It is better to be a crystal and be broken, Than to remain perfect like a tile upon the housetop." と別れの言葉を投げかけたといわれています。心に残る言葉です。▼最近になって、松陰直筆の辞世(「此程に思定めし出立はけふきくこそ嬉しかりける」)が発見されたとのこと。山口例会の記憶

が鮮明な時期に、印象深いニュースでした。▼まだまだ寒い日が続きます。皆様ご自愛ください。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 77

2014年1月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 田村 道美)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話 & FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.77 January 31, 2014